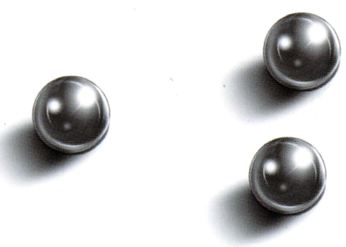


PACHINKO MUSEUM

パチンコ博物館

PACHINKO MUSEUM





新生「日本遊技史研究協会・パチンコ博物館」の歩み

私がパチンコと出会ったのは、7歳の時でした。東京のデパートの屋上遊園地に置かれていた、中古パチンコ台を改造して作られた子供用のゲーム機で、手打ち式パチンコの面白さ、奥深いゲーム性に、すっかり魅了された私は、小学校5年生、11歳にしてすでに中古パチンコ台を購入して研究するほどの熱烈なパチンコファンとなりました。

以来、パチンコ研究に没頭。19歳にしてパチンコ店の従業員となってパチンコ業界入りするも、仕事と併行し、日進月歩のパチンコ台を次々購入しては、細部にわたって研究するという趣味を持ち続けていました。

しかし、次第に所有する台数が増える中、やがて自宅が手狭になるという事態に陥るに至り、一時は所有していた台の処分を検討したこともありました。その時にふと、「パチンコ業界には歴代のパチンコ台を始めとする遊技台が、史料として残されているのか？」という疑問が湧きました。

そこでパチンコ業界に、博物館を始めとした史料を公開する施設がないかを調べてみたのですが、驚くべきことに、日本固有の娯楽として市民権を得ているパチンコでありながら、そのような施設が皆無であると知り、所有台の処分を中止すると共に昭和62年、史上初の遊技機収集家連絡組織「日本遊技機保存協会」を結成し、同志を募って、将来的な「パチンコ博物館」設立を目標として活動を開始しました。以降、次第に活動が世の中に知られるようになり、マスコミにおいてもその活動が度々取り上げられるようになったのですが、元々「非営利」という立場である我々の「パチンコ博物館構想」には、その活動を支援して下さる「スポンサー」が必要です。

しかしながら残念なことにパチンコ業界の「史料を後世に残そう。」という意識は希薄と言わざるを得ず、我々は業界団体の所有する史料点数や重要性をしのぐレベルにまで到達しながらも「パチンコ博物館」の設立は、まったく具体性を帯びることのない、実に悶々とした日々を送っておりました。

しかしそんな時に私に思わぬ幸運が訪れました。本当にたまたま、客として出入りしていたパチンコ店のオーナーこそが、今日まで一貫して当「パチンコ博物館」の設立から拡大までを支援し続けて頂いておりますヤワタグループ、八幡正毅会長だったのです。我々個人が、どうしても叶えることのできなかった「パチンコ博物館」の設立は、平成11年の、この出会いから急転を見せることとなり、ヤワタグループ直営パチンコ店における展示を経て、平成16年秋には東京、上野に展示品を移設統合し、独立した形での「パチンコ博物館」を開設。さらに今搬、奇しくも私の出身地でもある千葉県旭市に拡張を果たせましたことは、八幡会長の長年の御力添えの賜物であり、この場を拝借致しまして、改めて深謝申し上げる次第です。

加えて、新たにヤワタグループのビジネスパートナーであるNEXUS㈱の星野敏社長、㈱パラッツォ東京プラザ 徐東湖社長、㈱平成観光 東野昌一社長の深い御理解を賜り、「遊びの文化、パチンコを後世に伝承させる。」というヤワタグループ、NEXUS㈱、㈱パラッツォ、㈱平成観光、私以下「日本遊技史研究協会」(「日本遊技機保存協会」改め)会員一同の共通認識を、これまでにないスケールにて、御来館者各位に御覧頂ける、総合的なパチンコ文化の資料館たる「新・パチンコ博物館」の開館に至りましたことは、少年の日より志した私の夢、文化として後世に語り継ぎたいパチンコへの想いが結実したものと、大変喜んでおります。全国を東奔西走し、1つ1つ散逸していた遊技機を収集し、歴史的重要度に鑑みて厳選致しました「こだわりの逸品揃いの展示品」より、時代を彩った名機の息吹を感じて頂き、それらを保存してゆくことの重要性を御理解下さいますよう、切に御願い申し上げる次第です。



平成24年1月

牧野 哲也

日本遊技史研究協会 主任研究員

パチンコのルーツ

「パチンコ」のルーツと言えば長い間「コリントゲーム」を縦型にしたといわれてきた。しかし近年では、「パチンコのルーツは、ヨーロッパ地方の「ウォールマシン。」というのが定説。

「ウォールマシン」は、パチンコと同じ縦型の遊技機で発祥はイギリス。

登場時期は1895年（明治28年）頃と言われている。幾度かの改良を経て登場した1900年（明治33年）頃の「ウォールマシン」の「オールウィン」と呼ばれるタイプなどは、手打ちのハンドル、玉を使用して遊技すること、玉が打ち出されるレール…と驚くほど「パチンコ」との共通点が多く、この「ウォールマシン」が「パチンコ」の原形である、とは疑う余地もない。

その後「ウォールマシン」はドイツやフランス（注：フランスでは「マシン・ア・スー」と呼ぶ）でも生産されるようになり、その一部は1920年（大正9年）以降、オーストラリアやインドなどに輸出されていたという。

日本に「ウォールマシン」が輸入された時期については諸説があるが、おおむね大正時代末から昭和初期にアメリカ経由で伝来したようである。

これに昭和初期に改良が加えられ、次第に全国へと広がった。

当初は縁日などの露店営業であったという。



写真提供/山田 清一氏

「パチンコの父」の偉業を忘れるな！

パチンコの歴史を語る上で忘れてはいけない人物…それが「パチンコの父」別名「パチンコの神様」こと正村竹一（まさむらたけいち）氏（1906年～1975年）である。

岐阜県稲葉郡茜部（あかなべ）村（現岐阜市）の貧農の三男として生まれた正村氏は昭和11年、30歳で名古屋市にパチンコ店「スピード野球ボール」を開店。戦後はパチンコ台の製造を手がけ、昭和23年、独特の釘配列と「風車」からなる「正村ゲージ」を考案、全国のパチンコを席巻した「正村ゲージ」のパチンコ台の爆発的な売れ行きにより「今太閤」と称されるほどの地位を築いた。

しかし、正村氏は周囲の人の進言をよそに「正村ゲージ」の特許を取得せず、「仲間うちのことだで、みんなで仲よう使やええがや。」という名言を残し、広く同業者に「正村ゲージ」の使用を認めた。これにより、他のメーカーが「正村ゲージ」を使用した台作りが可能となったことが、今日のパチンコの発展へとつながっている。



写真提供/正村竹一 資料室

正村氏の功績と言えば、この「正村ゲージ」の考案にまつわる話が、とりわけ有名ではあるが、実はこの他にも正村氏は全国のパチンコ店に出向いて直接、経営、釘調整の指導を行い、加えて後のパチンコ業界を支える多くの人材をも指導したことも見のがせない。

パチンコメーカーとしても、戦後いち早く、名古屋に集散する紅茶輸出用ティーチェストのベニヤ板（パチンコの盤面）、軍需工場で生産されていたベアリング球（パチンコ玉）、愛知県三河地方の農家が温室用として使用していたガラス（パチンコ台のガラス）など、名古屋で揃うパチンコ台の原材料に注目し、物資が乏しく、物の生産がおぼつかなかったこの時期、いち早く全国にパチンコ台を供給することに尽力したことなども大きな功績と言えるだろう。

現在パチンコ業界に携わる人、また日々パチンコを遊技しているファンの人すべてに、正村氏の偉業の数々を知り、正村氏に感謝してほしいと念願してやまない。



「日本の大衆文化」としてのパチンコ



古来より、日本ではギャンブルを「バクチ」と呼び、それを行う事は「不真面目の象徴」として忌み嫌ってきたという歴史的な経緯があります。その流れから、現代においてもパチンコの持つギャンブル性を指し、偏見を持つ人もすくなくないという実態があることは、残念ながら、やむを得ない側面もあるでしょう。ですが、そのパチンコが、なぜ禁止されることなく、現在に至っているのかを、正しく理解している方は少ないと思われます。実は、パチンコにはかつて存続の危機がありました。昭和29年のことです。昭和27年から流行していた、玉が現代のパチンコ以上のスピード高速連射可能な、いわゆる「連発式パチンコ」の流行による射幸性の向上を見かねた全国の公安委員会は、昭和30年春(注:都道府県により期日には若干の差異がある。)を以て、「連発式パチンコ」を禁止することを業者側に通達します。これによって、全国のパチンコ店は4/5あまりが転廃業を余儀なくされ、またパチンコ台メーカーも多くが倒産する事態となりました。まさに壊滅的な打撃であったと言えるのですが、この時、規制の先にあったものは、パチンコそのものの禁止であったといわれています。ではなぜ、行政がパチンコを禁止しなかったのでしょうか？それは、当時の警察庁の見解に見て取れます。(以下、「パチンコ百年史」=(株)アド・サークル刊より引用)

「ただ、懸命に働いた後の疲れた身体、又すさんだ心は適当な娯楽または憩いを要求するのであって人間はこれによって明日への生命欲、生活意欲を保持向上させることができるのである。敗戦という有史以来の大打撃を受け、経済的、精神的に暗澹たる無気力な状態にある時、ぱちんこ遊技が多くの人のレクリエーションとなり、娯楽となって、明日への意欲を振い立たせたこともあったと思われる。またぱちんこ遊技が射幸心をそそる恐れのある遊技であることはいうまでもないが、人間に射幸心というものがある限り、射幸心をそそるおそれのある遊技を全廃することは不適当であり、ぱちんこが健全な方法で人間の射幸心を満たすものであれば、禁止する必要はないと思われる。」(原文のまま掲載)
こうして、パチンコの存在は許されました。そして、以降は台の進化と、サービスの向上によって、今日まで「国民的娯楽」としての地位を築いてきたのです。

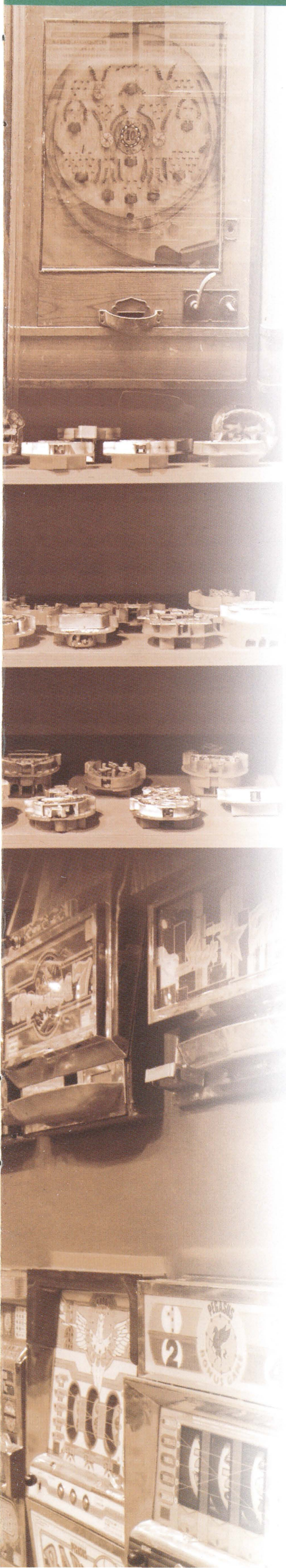
お金を使う遊技だからこそ、パチンコは1分間に100個以下の玉の発射、パチスロは4.1秒に1回転しかリールを回すことができなくなっていることで、「負け過ぎ」を防ぐという、海外の「ギャンブル」とは一線を画す配慮も成されています。その上でパチンコは日本人の「身近で手軽なレジャー」として存在し続けています。そのルーツは、戦前にも追い求めることができますが、戦後だけでも、平成24年現在で、実に約70年弱もの長い間、我が国固有の遊びとして国民生活に定着し続けてきたパチンコは、今や立派な、「日本の大衆文化」と言えると思います。

近年は、遊ぶのに以前より投資がかかるようになったという批判もありますが、貸玉料金を下げて少額でも遊びやすくするといった取り組みや、比較的大当り期待度の高い遊技機の開発によって、本来あるべき、気軽に楽しめるパチンコへの転換も図られている最中にあります。

これからもパチンコは、日本の「遊びの文化」の核として君臨し続ける存在であることは間違いありません。



「パチンコ博物館」はヤワタグループが育てて参りました



「文化」としてパチンコを捉えようとしないパチンコ業界の在り方に、強い危惧を覚え、またパチンコ店ユーザーのお客様には、想い出の名機と触れ合うことで、パチンコ業界への愛着を深め、理解を促進する場を提供したいとの思いから、平成11年よりヤワタグループでは、志を同じくして活動していた遊技機収集研究家の牧野哲也の個人活動を支援し、直営パチンコ店「パーラーWAKO」において、「パチンコ博物館」を併設。その活動は、マスコミにも広く取り上げられ、全国から来館者が訪れるまでになりました。平成16年からは、東京、上野の「パチンコ村」と称する遊技機メーカー、商社の集まる一角に「パチンコ博物館」を独立、移転させて、業界内外から数万人にも上がる来館者を呼ぶ、大反響を得るに至りました。更に、今回の移転リニューアルまで十余年、ヤワタグループは一貫して「パチンコ博物館」の支援、育成に努めて参りました。

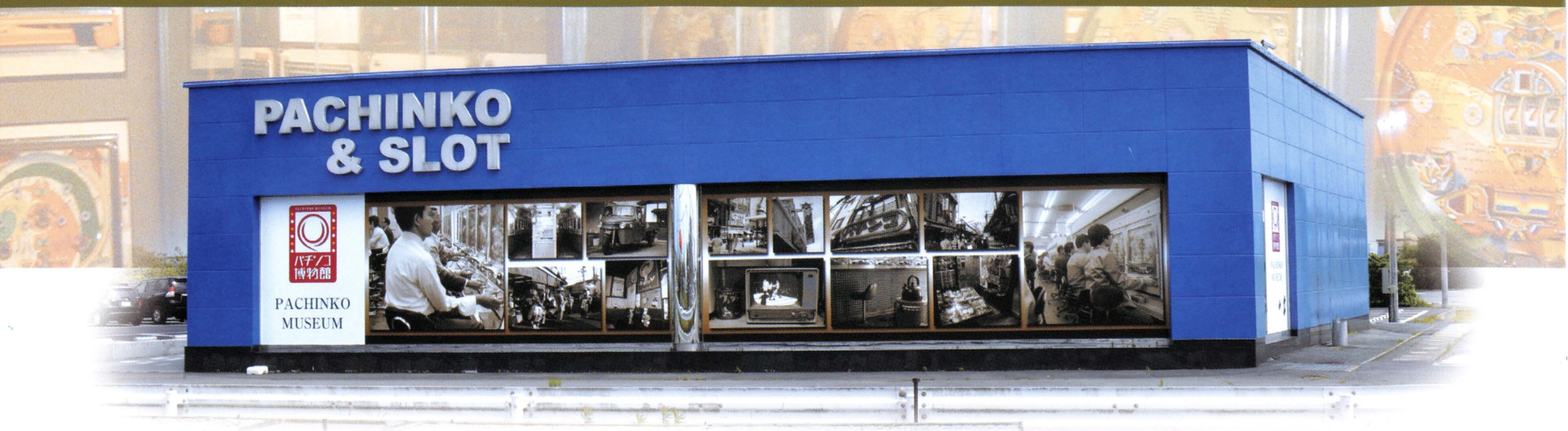


「歴史資料」を残すためには「今」しかないことをご理解下さい。

「パチンコ博物館」の必要性について、「古い遊技機ぐらい、どこかに残っているだろう。」「メーカーが保管しているだろう。」といった誤認識を耳にすると、私たちは慨嘆に堪えない思いが致します。

すでに「歴史資料」となり得る遊技機は、メーカー、業界団体にも断片的にしか残っておらず、また残っていたとしても資料性において、必ずしも重要度と合致した物ではないことが少なくないことをご指摘させて頂きたく思います。当館の展示品は「単なる古い遊技機」ではありません。時代を彩ったエポックメイキングな機種を、長年、遊技機の変化だけを見つめ続けてきたベテラン遊技機研究者ならではの視点で厳選し、すでに散逸してしまっていた遊技機を、まさに全国行脚で1つ1つ入手した、「こだわりの逸品」揃いです。今残しておかなければ、二度と揃うことのない遊技機群であるということを是非ご理解頂ければ幸いです。

パチンコ博物館 館内ご紹介





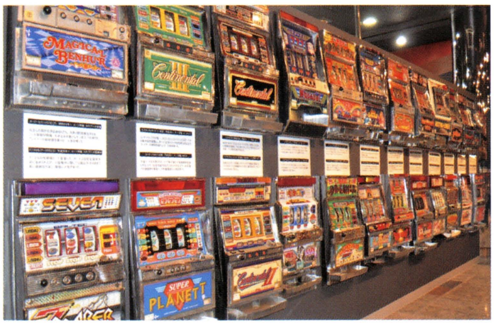
昭和初期から現代までの懐かしいパチンコ台やパチスロ機を圧倒的なボリュームで展示。





全ての機種に説明プレートを掲示。





国内初の本格的パチスロ展示コーナーも開設。



黎明期の貴重なパチンコ機も充実。



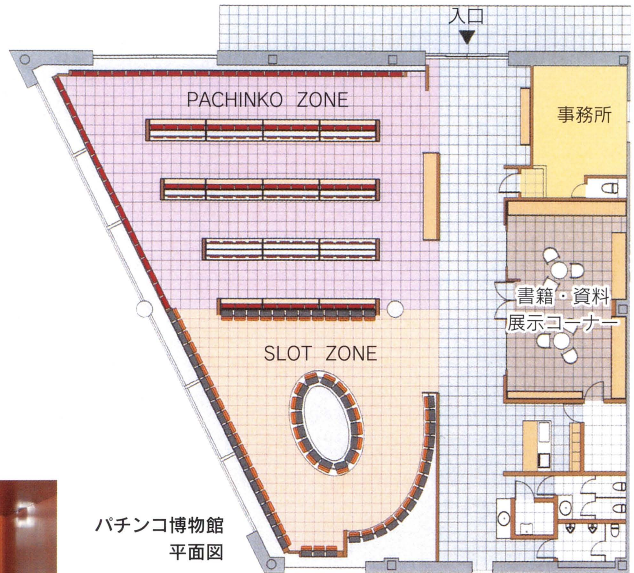
通路もゆったり。団体様ご利用もOK。



パチスロ試打コーナー（メダル不使用）

パチンコの歴史や文化を知るうえで大変貴重な資料を一同に集め収蔵している膨大なパチンコ関係資料の中から、選りすぐりった物ばかりを、昭和初期から年代ごとにピックアップして展示しています。昔夢中になって遊んだ懐かしいパチンコ台やパチスロ機が勢揃いしていますので昔を思い出しながらお楽しみ下さい。





パチンコ博物館
平面図



パチンコ業界雑誌の
バックナンバーが揃っています。



① PLAY GRAPH
② 月刊 Amusement Japan
③ GreeNBelt
④ 月刊娯楽産業

周辺機器

手動式、電動式とも、カウンター設置型の玉貸機、初期型のジェットカウンター、さらに昭和20年代末ごろから使われていた玉研磨機など往年の周辺機器を紹介するコーナーも設置。





チューリップ



昭和40年代に入り、本格的に流行したチューリップは、パチンコの代名詞ともなった。時代によりさまざまな形状の物が作られた。

プレート



台のガラスに貼り付け、客にさまざまな告知を行うプレート。「打止」の達成感を、このプレートで味わったファンも多い。

センター役物

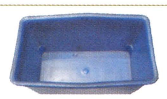


入賞すると、チューリップなどへ連動し、チャンスを広げるセンター役物は、ファンの心を捉えようと、いつの時代にも創意工夫が成され、多種多様に及ぶ。



■ 製品おもちゃ・ブリキのひかり号

いっぱい玉を出したお父さんが誇らしげに持ち帰ってくる景品が、子供の密かな楽しみだった。



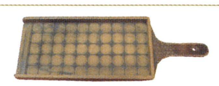
■ 玉箱（昭和50年代後半頃）

オールドファンにはおなじみのソフトビニール素材の玉箱。



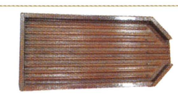
■ 玉箱（昭和30年代後半頃）

木製で400個程度しか入らない小さな玉箱。手打ち時代ならではのサイズ。



■ 硬貨計数皿（昭和30年代後半頃）

売上金（10円硬貨）を数えるのも手作業であった時代、閉店後の売上金計数は、このような道具で行われた。



■ 計数皿（昭和30年代後半頃）

玉皿に書かれた目盛りで玉を計数する。昔は客の出玉を数えるのも人手によるものであった。



日本遊技史研究協会
研究員
鍬形　和紀

幼いころ父親がよくおもちゃに中古のパチンコ台を買って来ました。釘の間を動く玉の動きも楽しかったですが、玉の払い出しやチューリップの開閉がすべて1個の玉の重量で動いていたことが不思議でした。テコの原理を用いた日本古来のからくり技術が古いパチンコ台には詰まっています。
その後、興味を持って集め始めた台が大量のコレクションとなりましたが、このたび、まだアナログだったころの台や役物をパチンコ博物館のご協力で皆様に見て頂ける機会を与えて頂けたことをうれしく思います。

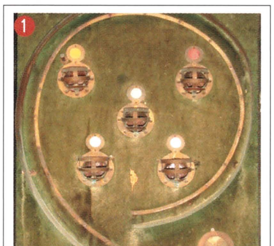


日本遊技史研究協会
研究員
須田　剛志

学生時代にバニーガールでパチスロの面白さにハマる。それからというもの、打った事のない機種を求め、あちこち探し回る日々を続けました。
17年程前のある時、知人からビッグパルサーを譲り受け、実機所有者に。暫くの間は、特に収集活動を行っていなかったが、引越しを機に収集を開始し、思い入れのある機種や、設置店を見つけられず打てなかった機種などを中心に、現在、約350機種程所有しています。

年表が語る パチンコの歩み

年代	大正末期	昭和3年 1928	4年 1929	5年 1930	6年 1931	7年 1932	8年 1933	10年 1935	11年 1936	15年 1940
主な出来事	この頃露天商の間でパチンコの始祖的な遊技機が使われるようになったといわれる。	外国製遊技機を改良した遊技機で遊技場が開業。	大阪、京都において「自動球戯機」出店が許可される。(パチンコ許可営業の始まり)	名古屋で「自動球遊機」の設置が許可される。	パチンコ型遊技機の製造、営業がしだいに増える。	大阪府警「一銭パチンコ」禁止。玉ではなく皇室の御紋の入った硬貨を遊技に使用するのは、まかりならないという理由による。	「一銭パチンコ」は硬貨を使わずメダル式に改良される。(金沢で再認可)「コリントゲーム」「スマートボール」など、いわゆる「横もの」が流行する。	「メダル式パチンコ」が流行。獲得したメダルを商品に交換する方式。遊技機メーカー「京楽」の藤井正一氏が、メダルを使用せず賞球が払い出される28穴のパチンコ機「スチールボール野球機」を考案。業界で初めての組合「愛知県名古屋遊戯器製造業者組合」を結成する。(現在のパチンコ機の構造の始祖となる画期的な機種の登場)	正村竹一氏、パチンコ店「スピード野球ボール」を名古屋市に開店する。	パチンコ、スマートボール等の遊技機製造禁止。(戦時体制の「贅沢品の製造販売規制」による)
解説				投入口に一銭銅貨を入れると玉が出て、入賞すると一銭銅貨又は、メダル等が払い出されるもの。この頃『パチンコ』という名称に。同県、県警保安課それを申請許可。			このため払い戻しはすべてメダルで行われ景品に直接一銭銅貨を払い出せなくなったため『景品交換』をする必要が生じ、これが現在のパチンコ営業のスタイルとなった。	賞品として現金が出るパチンコの禁止に伴い、「景品交換」という概念が生まれる。		時代が戦争へと突入してゆく中、パチンコ店営業も、ままならなくなっていった。
	黎明期						誕生期		正村ゲージ登場	
時代背景	モダンボーイ、モダンガールと称しお洒落な人々が、銀座を闊歩。ラジオ放送始る。	地下鉄銀座線(渋谷～浅草)開通。	エンタツ、アチャコの漫才コンビが日本中でブームに。	日本ダービーが目黒競馬場で開催される。パチンコが台湾、樺太等でも流行。	満州事変勃発 このころ麻雀が流行	5.15事件発生	日本 国際連盟より脱退	芥川賞、直木賞が設立される	2・26事件発生	日独伊三国軍事同盟が結ばれる



始祖的パチンコ系遊技機(製造メーカー不詳)

現金払い出し(昭和初期)

1銭硬貨を投入すると打ち玉が1個でる。左肩入賞で3銭、右肩入賞で2銭の賞金が出る。その他への入賞はアウト。どこにも入賞しない場合は打ち直し。昭和7年以降、現金での払い出しは禁止となる。



小物(製造メーカー不詳)

2、3、4個きり(昭和21年頃)

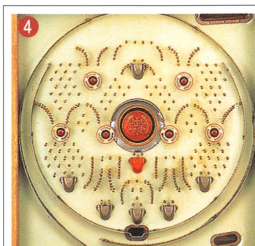
入賞穴の数は多いが、賞球は入賞した穴により、2、3、4個のいずれかと少ない。釘も均等に打たれただけの「バラ釘」であり、ゆっくり、単調に玉が落下するだけでスリルは乏しい。



メダル式パチンコ(製造メーカー不詳)

メダル払い出し(昭和24年頃)

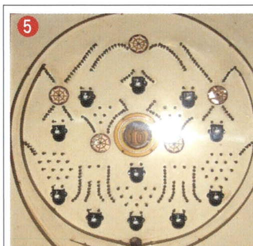
賞球ではなく、メダルによる払い出し方式のパチンコ台で、現金での払い出しが禁止されてから、戦前も使用されていたタイプだが、戦後になっても、例えば群馬県の一部では昭和30年頃まで、メダル方式パチンコが残存していた。



正村ゲージ(正村商会)

オール15(昭和25年頃)

パチンコを「大人の遊び」へ飛躍させた原動力である「正村ゲージ」の開発・普及はパチンコに革命をもたらし、現代パチンコの基礎を築いた。



天風車(製造メーカー不詳)

オール10(昭和25年頃)

天に風車を配して、その左右に広がる釘の構成が特徴的な機種。「天四本」からなる正統派の「正村ゲージ」とは一線を画したこのような機種は、一般的とは言えないが、この時代には散見される。

16年	18年	21年	23年	24年	26年	27年	29年	30年	32年	33年
1941	1943	1946	1948	1949	1951	1952	1954	1955	1957	1958
金属回収により、玉、釘等が供出させられた。	太平洋戦争に伴い「企業整備令」に基づきパチンコの転廃業が激増。	パチンコが復活。名古屋で、いち早く生産開始。戦前のパチンコ台「小物」が生産復活。	「パチンコの神様」正村竹一氏が『正村ゲージ』を考案。名古屋を中心に、パチンコが大ブームとなる。貸玉料金が一円から二円に値上げ。	同一数の賞球が出る「オール物」考案される。同伴者のない18歳未満の入場禁止。	全遊連結成。	菊山徳治氏考案の連発式が登場。店舗数は三万軒を超し、ピーク時には、四万五三一七店舗を記録。	連発式パチンコが禁止。一度に負ける額が大きく射幸心をあおるという理由で禁止に。七割の業者が転廃業に。換金行為禁止。店舗数は二万九四一六に。	パチンコ店舗数激減。翌昭和31年には八千八百軒にまで減る 警視庁一式、二式、三式という新しい遊技機の基準を発表。玉に刻印する技術が生まれた。一二三九一店舗に。二式七分ゲージ	「ジンミット」（注＊「神武景気をミットで受け止めよう」と命名されたもの）「コミックゲート」といった人気センター役物が登場。	竹屋の竹内幸平氏により考案されたパチンコ玉補給装置登場。雀球開発される。

これ以降のパチンコ機には、センター部分に「役物」が付いた物が一般的となり、メーカー及び部品商社における「役物開発競争」時代に突入。

連発式パチンコ禁止に伴い、約8割のパチンコ店が転廃業を余儀なくされ、メーカーも多数が倒産した。パチンコ冬の時代。

ジンミット（西陣）
三式衛生
単発式（竹屋）


連発式オール20

（昭和28年頃）オール20
丸友製作所

パチンコメーカー、豊国遊機の菊山徳治氏の考案した高速連射が可能なパチンコは、全国に4万軒以上のパチンコ店が乱立するという一大ブームをおこすが、その射幸性の高さから、昭和30年に使用禁止となる。



オール20

このころパチンコメーカーは約六〇〇社となる。

パチンコに革命をもたらした「正村ゲージ」は、登場すると同時に大人気となる。これにより、パチンコはそれまでの「子供も遊べる」娯楽から、法令で18歳未満の遊技を禁じた「大人のための」娯楽へと進化した。

敗戦の翌年、混乱の中で庶民の娯楽としていち早く復活。

基本的にパチンコ台はすべて処分された。このため戦前の創成期のパチンコ台は隠匿されていたごくわずかな例外を除き存在しない。

連発の誕生　｜　連発禁止時代　｜　チューリップ普及

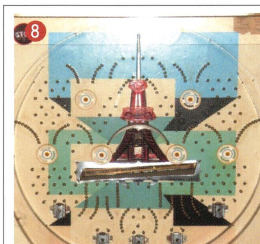
16年	18年	21年	23年	24年	26年	27年	29年	30年	32年	33年
太平洋戦争が起こる。	東京市と東京府が統合され東京都が誕生。	東京に喫茶店復活。珈琲五円。ダービー復活。	千円札登場。	「三等重役」「社用族」「親指族」が流行語に。	初の競艇がオープン。	公衆電話料金が五円から十円に。スーパーマーケット登場。テレビ放送開始。	全国時事宝くじ発足。「プロレス」「サイクリング」が流行。自由民主党結成。	五千札、百円硬貨。自動販売機登場。鍋底不況始まる。	一万円札登場。東京タワー完成。	雷族横行。皇太子御成婚。国民健康保険。



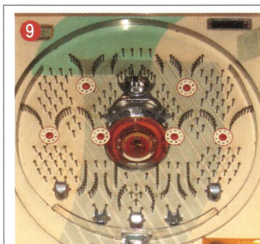
正村ゲージ（武内製作所）
オール20（昭和25年頃）
「正村ゲージ」の中では最も賞球数が多いタイプだが、そのぶん入賞穴の数は最も少なくなっている。従って、当時としては最も勝負が早い機種であり、連発式の基礎ともなった。



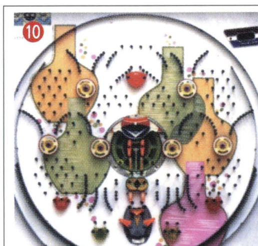
二式半ゲージ（豊国遊機）
オール15（昭和30年頃）
「基準第二式」と呼ばれる、連発式パチンコ規制後の台。一応連発式だが、玉のアウト、セーフが決してからでないと次の玉が打てない。このためゲージ盤が半分にされている。



銀座タワー（銀座）
オール15／昭和35年頃
見た目の通り、「東京タワー」をモチーフにした初期役物機の一つ。役物によって玉が多く出るのではなく、入賞するとタワー内のエレベーターが上昇するという視覚的楽しさを追求した機種。



夢の国（西陣）
オール15（昭和35年頃）
昭和32年より、「センター役物」を搭載したパチンコ台が主流となっていた。この機種では賞球が払い出される際に鳩時計のように「おかめ」の顔が全面に飛び出してくる仕掛けが施されている。



センターダルマ（大一）
オール15／昭和40年頃
センター役物に入賞すると、役物が反転。次回の入賞チャンスを広げる。

【参考文献】◇「パチンコ百年史」㈱アド・サークル　◇「遊技通信でみるパチンコ業界の60年」㈱遊技通信社

年表が語る パチンコの歩み

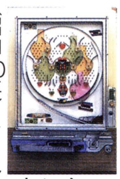
年代	主な出来事
35年 1960	「チューリップ」「無人機」考案される。
36年 1961	景品交換所方式の原点、いわゆる「大阪方式」が始まる。
37年 1962	玉自動追加装置（西陣「宇宙パイプ」「月光ライン」）開発。パチンコ玉の追加が無人化になる。大型店が増え始める。
39年 1964	平和が分離式遊技機「ユニパック」を開発。**チューリップ付き遊技機が許可地域において大流行開始。**
40年 1965	オリンピアマシン（パチスロ原型）登場。店舗数一万二千軒。
41年 1966	パチンコ台製造上の規則が緩和され、魅力的な役物が登場することにより、パチンコブームが加速する
43年 1968	最高設置台数を五百台に。駐車場付パチンコ店出現。過当競争防止のために自主規制。
44年 1969	機械基準の緩和によって、連発式パチンコ十五年ぶりに復活。★チューリップが本格的に普及。・但し、発射出きる玉は、一分間に百発以内に規制される。
46年 1971	玉補給用のコンピューター開発される。（西陣・エース電研などが続々発表）
47年 1972	アレンジボール登場。郊外型ホールも登場。貸玉一個が三円になる。（二十四年ぶりの値上げ）**この頃、それまで立って遊技していたパチンコが椅子に座って遊技するようになっていく。**
48年 1973	電動式パチンコ台開発される。景品の最高限度額が500円から1,000円になる。
49年 1974	「電動式役物」登場。郊外ボーリング場がパチンコ店に転換開始。
50年 1975	「開けチューリップ」（間寛平）がパチンコ史上初のヒットソングに。同名の映画（日活）も公開された。

解説

レコンジスター
マンモス（西陣）
零戦（平和）

パチンコ周辺機器のオートメーション化が加速し、人件費の抑制に効果を上げる。

風営法一部改正。遊技場の営業許可更新三ケ月ごととなる。



センターダルマ

大一（昭和40年）オール15

チューリップが搭載され、役物とも連動しており、非常に遊技性が高まっているのが特徴。これ以降、チュリーップは人気を得て、やがて爆発的なチューリップブームに突入してゆく。

自動補給装置が実用化される。

チューリップの普及を追い風として、パチンコ人気が高まった。

条件付きとは言え、連発式パチンコの復活はチューリップと相まって、パチンコ人気を不動のものとした。

モナペット（平和）
アポロ（平和）

考案された「電動パチンコ」であるが、当初は客側がスピードに慣れておらず、すぐに普及したわけではない。本格的普及は、昭和52年前後からである。

大三元（平和）

パチンコメーカーの釘打がコンピューター制御化される。

オイルショックを発端とした不況でボウリングブームが終焉。パチンコ店への転業が盛んになる。これによって、パチンコ店の立地も、従前の駅前主流から郊外が主流となる転機を迎えた。

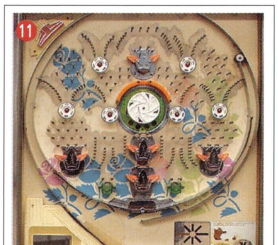
電動パチンコ時代

連発禁止時代 ／ 電動連発機時代

売上3,000億円 ／ チューリップ普及

時代背景

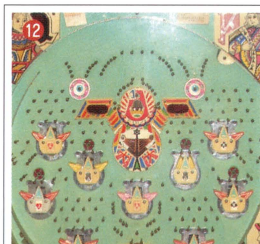
- 所得倍増計画。インスタント珈琲発売。カラーテレビ本放送。
- 東洋の魔女に人気。コカコーラ日本に進出。
- テレビ普及台数一千万台突破。
- 東海道新幹線、名神高速道路開通。
- 週休二日制
- 百円札廃止。ビートルズ来日。
- ヒッピー流行。
- 三億円事件。一千万円宝くじ発売。メキシコ五輪。
- 東名高速道路全線開通。
- 日本万国博覧会大阪で開催。大久保清事件。
- 浅間山荘事件。沖縄返還。ミュンヘン五輪。
- 金大中氏事件。太陽神戸銀行合併。
- 名馬ハイセイコー惜しまれ引退。小野田少尉帰国。
- 沖縄海洋博開催。ベトナム戦争終結。



パワーローリング（西陣）

オール15/昭和46年

センター役物中央穴に入賞すると、全てのチューリップが一斉に開くという機構が大人気となり、翌年以降も改良型のゲージが登場するほどの人気を得た。



パワーフラッシュ（西陣）

オール15/昭和48年

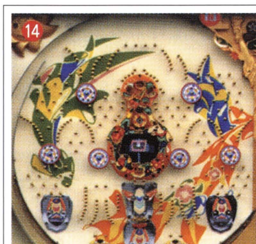
「大三元」（平和）と同様の個性的な機構が特徴。その衝撃のゲーム性は、天穴中央に入賞するとチューリップが全開するが、「JOKER」チューリップに入賞すると入賞した側全てのチューリップが閉じるというスリリングなものである。



ワニ（西陣）

オール11/昭和50年

役物上部に入賞した玉を、サルがかかえて下へ。するとサルが落とした玉をワニがパクリ。



手動、電動共用枠型普通機（平和）

オール15/昭和52年頃

手動ハンドルと電動ハンドルが両方付いている珍しい台枠に注目。
手動、電動の混在期に登場。



ゼロタイガー（平和）

オール13/昭和56年

羽根ものの元祖として、あまりにも有名。単独の機種としては、最高の生産台数を記録。

年	出来事	世相
51年 1976	パチンコ人口三千万人に。	有馬記念一レース百九十万円の売上げが日本レコード。
52年 1977	この頃オシボリ・ドリンク等をサービスするホールが出現。	芸能界大麻事件続発。
53年 1978	貸玉一個が四円になる。	成田空港開港
54年 1979	テレビゲーム機の影響でパチンコ売上減少。全遊協が十一月十四日を「パチンコの日」と制定。第一回「全国パチンコ感謝デー」実施。	東京サミット開催。
55年 1980	「三共」の『フィーバー』登場。（新潟県）初登場は新潟県長岡市の遊技場。	大平首相急死。山口百恵引退。モスクワ五輪。
56年 1981	『フィーバー』タイプのパチンコ台全国設置認可。同じくこの年、羽根もの「ゼロタイガー」も登場。パチンコ業界飛躍の年となる。	窓際のトットちゃん大流行。チャールズ・ダイアナ結婚。500円硬貨登場。
57年 1982	パチンコ店、店舗数一万二千軒となる。パチンコ市場ついに三兆円産業に。	ホテルニュージャパン火災。
58年 1983	高額紙幣玉貸機、景品ポス等、コンピューター内蔵の管理設備が相次いで製品化。	ロッキード疑惑で、田中角栄氏実刑判決。
59年 1984	デジパチのアタッカー開放時間が従前の半分の十五秒に規制される。警視庁指示のフィーバー機改造について全遊協と日工組が協議。	山口組、一和会抗争の激化。グリコ事件。ロサンゼルス五輪。
60年 1985	デジパチの10カウント規制が全国で実施される。出玉千三百個「フィーバー」という感じの出玉ではなかった。羽根もの「レッドライオン」（西陣）大ヒット。	阪神タイガース優勝。日航ジャンボ機墜落。おニャン子クラブ。
61年 1986	羽根ものの役物に「貯留機能」を付け、大当り継続性を高めた「ビックシューター」（平和）が登場。	NTT株百十九万円に。
62年 1987	「おまけ付きデジパチ登場」。パチンコ市場十兆円の大台に。カードシステムが相次いで発表される。	大型テレビ時代始まる。国鉄分解。JRスタート。
63年 1988	パチスロ二号機市場に登場。一ゲーム四秒台に。	瀬戸大橋開通。東京ドーム落成。イラン・イラク戦争。ソウル五輪。

許可地域ごとに、たちまち大ヒットするも、九月一日から、アタッカーの継続開放の上限が、最高十回迄に規制される。（規制前は打止め、または、パンクするまで無限に継続した。）しかし、「フィーバー」タイプ（通称「デジパチ」と命名される。）は大ブームを巻き起こす。

「貯留型羽根物」の登場により、羽根物人気が上昇。セブン機と比肩するパチンコ店営業の基幹機種の地位を不動のものにした。これ以降、いわゆる「パチンコ雑誌」が続々創刊され、パチンコブームは、ますます加速。

10カウント、10ラウンド、賞球13個で、約1,300個しか出玉がなくなったセブン機は、魅力が半減し、「連発式禁止以来の打撃になる。」との声も出て、業界は新基準機導入を前に混乱した。



ゼロタイガー
平和（昭和56年）オール13

いわゆる「羽根物」パチンコの元祖である。始動チャッカー入賞により羽根が開閉し、この時、役物中央のVゾーンに玉が入賞すると羽根が18回開閉。これを最高8回繰り返すというゲーム性は、絶大な人気を呼んだ。

「フィーバー」（SANKYO）を始めとするセブン機は、たちまちファンの話題をさらい、パチンコ産業のその後の躍進の原動力となった。

テレビゲーム、とりわけ「スペースインベーダー」（タイトー）を始めとするインベーダーゲームに若年層のファンを奪われ、若年層の奪還が急務となる。



手動、電動共用枠型普通機
平和（昭和52年頃）オール15

まだ、手打ち式パチンコと、電動パチンコが混在していた時期に登場し、客の好みによって、どちらのハンドルでも遊技可能という珍しい機種。

- ゼロタイガー（平和）
- オープンラス（SANKYO）
- キングスター（SANKYO）
- エレックスサンダーバード（西陣）
- アイドルセブン（大一）
- ルーキーZ（西陣）
- バトルエース（平和）
- スーパーコンビ（SANKYO）
- レッドライオン（西陣）
- キャプテンルーキー
- タンブラーA（京楽）
- スタジアム（三洋）
- ビッグシューター（平和）
- グランドホーク（京楽）
- スーパーブラザーズ11（西陣）

3兆円　10兆円

電動パチンコ時代
電動連発機時代
フィーバー時代
デジパチ時代
羽根もの時代
権利もの時代



フィーバー（SANKYO）
オール15/昭和56年
「オール7」による一発逆転のメカニズムは、現在のパチンコの源流となる歴史的な発明であった。これよりパチンコは、本格的なIC搭載型の機種が主流となり、普通機の衰退を招くことにもなった。



バトルエース（平和）
オール15/昭和57年
権利物の第1号機。役物内の突起を、うまくかわして役物手前中央のVゾーンに入賞すると最高10回のアタッカー開放権利発生。



ビッグシューター（平和）
オール13/昭和61年
大当たり中、役物内に玉をループする、いわゆる「貯留型羽根物」の元祖。その後の羽根物機種の大半が、「貯留型」であることからも、この機種が後の遊技機に与えた影響は大きい。



スーパーコンビⅡ（SANKYO）
オール13/昭和62年
3つ穴クルーンによる、スリリングな役物振り分けで絶大な人気を得た。大当たり中のメロディー「静かな湖畔」のメロディーが、今も耳について離れないというファンも少なくない。



パチンコ大賞13（西陣）
オール13/平成元年
その後も同社製デジパチに、たびたび登場している人気者「オヤジ」（通称）が、初めて登場したのがこの機種。 ドル箱に貯留された玉を一気に放出するというゲーム性で人気を得た。

【参考文献】◇「パチンコ百年史」㈱アド・サークル　◇「遊技通信でみるパチンコ業界の60年」㈱遊技通信社

年表が語る パチンコの歩み

年代		主な出来事	時代背景
平成1年	1989	「ドリームX」（奥村）大ヒット。	昭和天皇崩御。消費税スタート。ベルリンの壁崩壊。
2年	1990	プリペイドカードシステム導入スタート。連チャン性の高いデジパチが流行。全遊協解散。	平成天皇即位。大阪花の万博。
3年	1991	初の液晶カラーモニター付きデジパチ「麻雀物語」（平和）が話題をさらった。	バブル崩壊。湾岸戦争終結。ソ連崩壊。
4年	1992	プリペイドカードと遊技機を一体化したカード式パチンコ機「CR機」登場。	PKO法案可決。バルセロナ五輪開催。毛利氏宇宙へ。
5年	1993	連チャンデジパチ自粛決定。「CR花満開」（西陣）大ヒット。	UFOキャッチャー流行。皇太子御成婚。
6年	1994	CR機普及の為、CR機の連チャン加熱。既存の連チャン機を撤去勧告。CR「黄門ちゃま」大ヒット。連チャンデジパチが姿を消して行く中、射幸性が連チャンデジパチどころではないCR機が台頭。	松本サリン事件。長島巨人日本一。向井さん宇宙へ。
7年	1995	CR権利物「ギンギラパラダイス」大ブーム。CR機ブームとなりCRシステムのプレミアム化が発生。	地下鉄サリン事件。麻原彰晃逮捕。阪神大震災。
8年	1996	「CR大工の源さん」、「CRモンスターハウス」が大ヒット。パチンコ市場三十兆円の大台に。カード変造被害額が六百三十億円に達しパチンコ関連の事件、事故が相次ぐ。	アトランタ五輪開催。住専問題クローズアップ。O－157多発。
9年	1997	パチンコ依存症なる言葉が定着。マスコミのパチンコバッシング激化。社会的不適合機の名の基に、七十万台の撤去がスタート。	ペルー日本大使館人質事件。ダイアナ妃事故死。「失楽園」流行語。
10年	1998	リミッター付き新要件機登場。ホール倒産件数が、ピークとなる。	拓銀倒産。日債銀倒産。長野OP。W杯日本初出場。横浜日本一38年ぶり。
11年	1999	CR機「五回リミッター」撤廃。新基準機続々登場（大型店舗の進出ラッシュ）。第三、第四のカードシステム登場するも、カードシステムの不合理とコスト高がホールの足を引っ張る。	長銀倒産。東海村原発事故。

解説

「リミッター規制」を受け、この年から翌年にかけ「CR海物語」が爆発的な人気を得て、全国のパチンコ市場を席巻する現象を起こした。（「CR海物語」の初期版はリミッター機であった。）

この「5回リミッター」（確変継続を5回で強制終了させる機能）こそが、この規制による出玉数の減少を補い、ファン離れをくい止めようという、ホールの「高交換率営業」及び「無制限営業」を推進し、パチンコが従来持っていた「射幸性のバランス」を完全に崩壊させてしまうという、何とも皮肉な結果をもたらした。

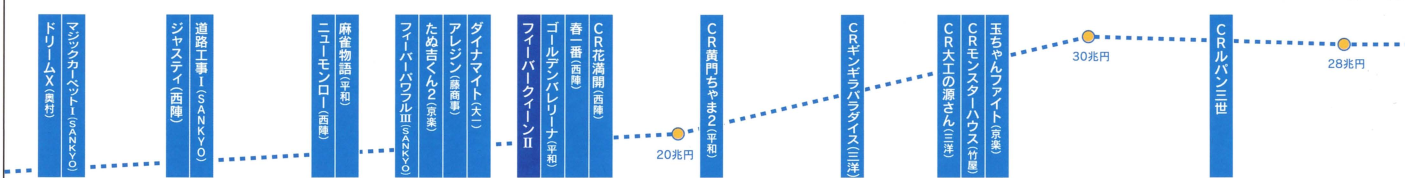
パチンコバッシングの要因は、ほとんどCR機のもたらした未曽有の射幸性にあったが、なぜか現実に自粛撤去された70万台のパチンコ機の9割以上は現金機であったという、何とも不可解な現象が起きた。

NTTのテレホンカードと基本的に同様の技術で作られた、初期の磁気カードによるプリペイドカードシステムは、その導入前から偽造カードの流通を確実視する識者が多数いたにもかかわらず、当時のカード会社は「10年間はセキュリティーが破られることはない。」と豪語し、カードを発行。しかし案の定10日と経たないうちに市中には偽造カードが横行し、この年までに取り返しのつかない大金がアングラマネー化した。

導入が進まないCR機に業を煮やした行政が、「確率変動2回ループ」「大当たり確率の3段階までの設定変更」という未曽有の射幸性をCR機に限り容認したことで、CR機の導入が一気に加速した。

その導入にあたって、導入コストが法外に高く、なおかつその費用負担は、最終的にファンの負け分から拠出される…という全国共通パチンコプリペイドカードはホール側、ファン側双方から歓迎されるはずもなく、CR機は、まったく普及しなかった。

大当たり確率が1/225と高く、納得の出玉ボリュームもあった「ドリームX」のヒットは、他メーカーの新機種設計にも影響を与えた。まさに健全で納得できる遊技が楽しめ、ホール、ファン共に近代では、パチンコ黄金期と言える活気に満ちた時代となった。



平成1年〜6年	7年〜8年	9年	10年〜11年
デジパチ時代 羽根もの時代 権利もの時代	CR機 全盛時代	何故か現金機撤去 CRバッシング	スロットブーム 混乱の時期



麻雀物語（平和）

7&15/平成3年

カラー液晶モニターを初めて採用した機種であると共に、超人気機種として、現在も「伝説の名機」である。大当り確率が1/240と甘い上、連チャン率が20%以上もあったことがファンに大きく支持された点。



フィーバーパワフルIII（SANKYO）

7&15/平成4年

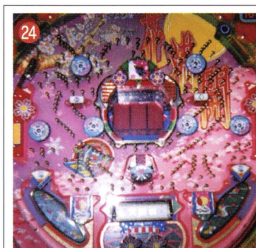
8ラインで、多彩な大当りパターンを実現。「麻雀物語」より登場は遅いが、登場即「麻雀物語」と比肩する超人気機種となり、その後もたびたびリメイク機種が登場している。



フィーバークイーンII（SANKYO）

7&15/平成5年

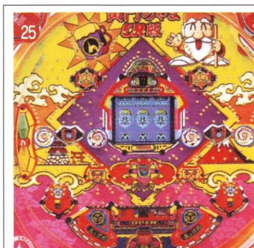
大型ドラムのスリリングを左アクションで、長い人気を維持したことで知られる。一旦ハズしても、ドラムが再始動して大当りとなるアクションが、ファンの心を掴んだ。



CR花満開（西陣）

5&10&15/平成5年

「CR機」イコール「爆裂連チャン機」というイメージをファンに定着させた機種。「確率変動」と「保留玉連チャン」を交えて大爆発する可能性を秘めていたので、特に、ヘビーマニアの支持は絶大なものがあった。



CR黄門ちゃま2（平和）

5&10&15/平成6年

初期CR機としては、「CR 花満開」（西陣）と共に、最大級のヒット機種。現在の機種にはない、確変2回ループによる爆発力は、今もファンの記憶に残っている。

年	西暦	パチンコ業界	世相
12年	2000	「CR海物語」シリーズが爆発的人気に	沖縄サミット開催。金大中北朝鮮訪問。シドニー五輪開催。
13年	2001	パチスロAT機大流行 パチスロ設置台数が130万台突破	小泉総理大臣が時の人に。国会中継を国民が注目。
14年	2002	パチンコ新内規により、賞球最少限度が4個に。「CR新海物語」シリーズ登場。	FIFAワールドカップが韓国・日本で開催。
15年	2003	「CR新海物語」シリーズが全国のパチンコ店を席巻。	イラク戦争勃発。
16年	2004	パチンコ新基準機登場。低い大当り確率、高い確変継続割合で一時人気を得るも、再び客離れへ。パチスロ吉宗、北斗の拳が大流行。	アテネ五輪開催。プラズマテレビがブームに。
17年	2005	新たな遊技機として「パロット」が登場	国際博覧会「愛地球博」開催
18年	2006	検定切れ遊技機いわゆる「みなし機」	FIFAワールドカップがドイツで開催
19年	2007	「CR花の慶次」と「CRスーパー海物語IN沖縄」が人気機種となる。	能登半島地震
20年	2008	貸玉料金を一個一円、二円等に抑えた「低貸玉料金営業」が目立つようになる。	ノーベル賞日本人多数受賞
21年	2009	「パチンコ攻略法」を騙る詐欺が社会問題化。東京都遊技業協同組合青年部会が注意喚起のイベントを開催。	オバマ氏、米国史上初の黒人大統領となる。
22年	2010	パチスロ5号機登場以降初めてパチスロ機設置台数が前月比増へ転じる。	チリで巨大地震発生。バンクーバー五輪開幕。
23年	2011	東日本大震災による電力不足により、パチンコ店の「輪番休業」「節電営業」が行われる。パチスロART機の人気が上昇。警察庁による広告・宣伝規制により、いわゆる「出玉イベント」等が消滅。	東北地方太平洋沖地震発生。

大震災に際しては、いち早く輪番休業等の自粛営業を行ったことはもちろんだが、各業界団体から巨額の義援金を拠出し、人的支援としてボランティアも多数を被災地に派したが、これがマスコミに「パチンコ」業界の善行として報道されることがほとんどないのは誠に遺憾なことである。

特に「1円パチンコ」は遊技機の射幸性の上昇、通常時の賞球数の減少などを背景として、その後定着を見せるようになり、パチンコ店営業の1ジャンルと言っても過言ではないまでに普及した。しかし、それによって本来営業の基幹となるべき4円パチンコの衰退という弊害も招き、またそもそもは、4円ではファンが付いて来られないまでにインフレ化したパチンコの遊技性こそが低料金貸玉営業の訴求要因であるという現実を是正する必要性を、いみじくも物語る結果であるとも言え、今後のパチンコのあり方に含みを持たせる現象であるとも考えられる。

「みなし機」の撤去により、昔ながらの小型店は多くが競争力を失い、閉店を余儀なくされた。設置機種による差別化が図れなくなったパチンコ店は、これ以降「店舗の大型化競争」の道を辿らざるを得なくなった。

射幸性が下がるのかと思いきや、大当たり確率の下限は1/500まで、始動チャッカー入賞による賞球は3個まで…という思わず首をかしげたくなるスペックが容認されたことで、高射幸性のセブン機が続々登場した。一方、パチスロも射幸性の高い機種が人気を得て、とにかく投資のかかる遊技となったことから、やがてファン離れの兆しも見え始めた。

「CR海物語」は爆発的人気機種となり、一挙に大量導入する店はもとより、一旦導入した店でも増台が繰り返されるという現象を呼び、パチンコ店営業に不可欠な存在となった。



パチンコ業界再編の始まり

東日本大震災 被災地への義援金活動の取組み

東日本大震災の発生を受けて、パチンコ業界は即座に業界を挙げて義援金の拠出を決定。内訳は、メーカー、組合、パチンコ店経営企業による寄付の他に、お客様によるパチンコ店の店頭での善意の募金への参加と多岐にわたり、多額の義援金を集めることに成功。そのすべてが被災地の復興支援に役立てられた。

震災時のパチンコ業界の支援内容

パチンコ業界14団体を通じた義援金
45億2847万円（2011年9月1日時点）
各企業独自の義援金
11億6550万円（公表されたもののみ）
合計　56億9397万円
（2011/9/1時点で公開されているだけ）

その他 多数の物資・ボランティアの派遣・避難施設の提供等を行いました。



CRギンギラパラダイス（三洋）
5&10&15/平成7年
「魚群リーチ」が大当たり期待度大幅アップにつながるという、極めてシンプルながら、客を飽きさせないゲーム性は、空前のブームを生み、後継機でもある「CR海物語」シリーズヒットの基礎を築いた。確率変動は1/2突入、1回ループの権利物タイプ。



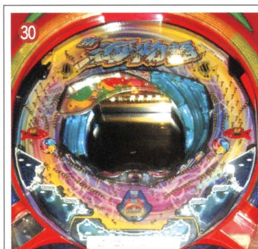
CR大工の源さん（三洋）
5&10&15/平成8年
確変2回ループと、確変終了後の時短100回転という爆発力の高いスペックで時代をリードした機種。一撃の出玉量はパチンコ史上屈指であり、ホールの主力機種として君臨した。



CRモンスターハウス（竹屋）
5&15/平成8年
確変は1回ループであるが、確変終了後は100回転の時短もあるため、爆発力を秘めたゲーム性が特徴。ホール導入後も増台、増台…と設置台数を増やすというケースが目立ったことでも知られる。

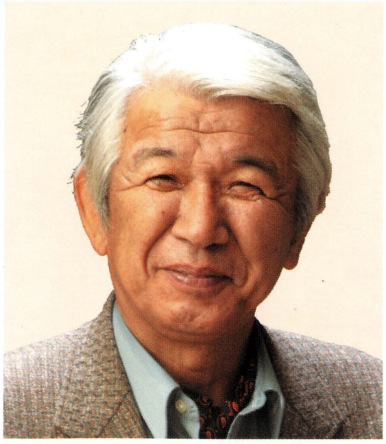


CRデラマイッタJ-3（豊丸）
6&15/平成10年
確変1回ループのCR機であるが、確変中も確変と判別しづらく、電動チューリップの開放もない、潜伏確変に似たゲーム性が特徴。確変は規制により5回連続で強制終了となる。いわゆる「リミッター機」。



CR新海物語M27（三洋）
4&15/平成14年
兄弟機のM56と共に、パチンコ史上最大級のヒットを記録し、その後の海物語ブームを決定付けた機種。確変終了後に100回転の俗に「ハーフスペック機」と呼ばれるタイプである。（M56は全ての大当りで時短あり。）

【参考文献】◇「パチンコ百年史」㈱アド・サークル　◇「遊技通信でみるパチンコ業界の60年」㈱遊技通信社



ヤワタグループ会長
八幡　正毅

私は、平成5年に異業種から縁あってパチンコ店の経営に参入しました。老舗業者も多いパチンコ業界においては、言わば「新参者」であり、業界のことは、率直に言うとあまりよく知らず、知り合いの同業者のアドバイスを受けながら、手探りでのパチンコ業界参入であったと言えます。「パチンコ業界の常識にとらわれない」私から見た、当時のパチンコ業界の「おかしい」ことの多くは、店舗の運営において、「お客様の利便性を損ねるのに、なぜこうなのか？」ということであり、私はそれを打ち壊すことで新時代のパチンコ店を誕生させて、現在に至っております。

パチンコと接するようになった私は、独学で「パチンコ業界の歴史経緯」というものを研究しましたが、どうしても実感のわかないことだらけでした。そこで、いわゆる“博物館”のような施設はないのか？」と思い、調べてみたのですが、遊技機メーカーにも資料が充分に残ってるとは言えない現状を知って愕然としたことを覚えています。そして、私はパチンコ業界の歴史資料を集めた「パチンコ博物館」の構想を抱くに至りましたが、資料探しを始めてみて到底困難な状況であると、ひしひしと感じることとなりました。

「もはや不可能なのか？」とあきらめかけた時に、実に奇遇というべき巡り合わせがありました。当時私が経営していたパチンコ店の常連客として、日本でも屈指の遊技機収集家である牧野哲也がいたのです。私は早速彼に「パチンコ博物館」の構想を語り意気投合、以来、私は経営するパチンコ店に続々、パチンコ名機の展示コーナーを開設し、平成16年からは、東京、上野に我が国初の本格的「パチンコ博物館」を開設。業界内外に大きな反響を呼ぶこととなりました。そしてこのたび「パチンコ博物館」は当地、千葉県旭市に移転、拡張の運びとなり、新たに今まで公開しなかったパチンコ機多数に加え、パチスロ機の展示も追加した「総合的遊技機博物館」として平成24年8月吉日、再スタート致しました。

「百聞は一見にしかず」と申しますが、どうぞ当「パチンコ博物館」において「本物」の遊技機文化にふれる一時をお過ごし頂きまして、パチンコ業界の歩みを正しく御理解頂く機会となりましたならば、私が日頃心で唱えております「パチンコ業界に対する感謝の念」を皆様にもお伝えすることが叶ったものと、幸甚に存じます。



株式会社 NPI総研
代表取締役　**伊藤　和彦**

パチンコ出店の企画コンサルタントとして22年間、身を置かせて頂いております者として、20兆円産業と言われる日本の「内需の王様」であるパチンコ業界にあって、その歴史文化を残さないでいることに疑問を感じておりました。

パチンコ・パチスロ機械メーカー、コンピュータメーカーをはじめとする周辺システムメーカー、建設業、不動産業、運送業等の関連売上も合算しますと巨大な産業でありますとともに、就業者数も40万人以上になると思われます。

ヤワタグループはパチンコ出店の為の企画開発コンサルタント及びデベロッパーとして数多く実績を残して参りました。今後もこの業界が「娯楽の王様」として成長し愛され続けることを願っております。

私は幸いにして、父と仰ぎ神様と崇拝するヤワタグループ会長と平成7年に出会わせて頂きました。私の子供になれと言って頂いた時の感動は言い表せません。会長の意思を継いでゆくことが使命と決めております。

またパチンコの父であらせられる正村竹一氏はじめ業界を育ててくださった多くの賢人の皆様に深く感謝致します。この業界が有ればこそ私達は生きてこれたのではないでしょうか。

最後にパチンコ業界各団体が寄付・寄贈・ボランティア活動で地域の皆様に貢献していることを、少しでも多くの皆様に知って頂くために微力ではありますが、パチンコ博物館の運営をさせて頂きたいと存じます。

皆様の益々のご繁栄をお祈り致しますと共に、更に一層のご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

協賛

㈱ 正栄プロジェクト	㈲ ユンド企画	㈱ セキネネオン	㈱ ベイブリッジ
㈱ セイブシステムリンク	㈱ 三慶商事	㈱ ＹＫＤ	㈱ アイテック
㈱ プレイグラフ社	㈱ アミューズメントプレスジャパン	㈱ アド・サークル	㈱ 娯楽産業協会



NEXUS株式会社
代表取締役　星野　敏

私が、パチンコ業界に参入したきっかけとは、あるセミナーにおいて、偶然にパチンコ店のオーナー様と知り合ったことにより、その業種を知ったことによるものです。

新規の業界参入、最初は戸惑いも多くありましたが、「何も知らなかったからこそ、新しい発想が生まれる」ことを原動力として、私の情熱を傾注できる産業としてのパチンコ店事業に今日まで邁進して参りました。今まで「パチンコ業界の歩み」という視点を持つ機会はなく、また過去の遊技機を時代を追って目にすることが出来る施設があることも、以前は知らずにおりました。

しかし、事業パートナーであるヤワタグループの八幡会長が「パチンコ博物館」をプロデュースされているとお聞きし、施設を見学させていただく機会があり、それを期に私は、八幡会長と共に「過去のパチンコ業界の資料を散逸させることなく後世に伝えてゆくことが、今の時代にパチンコ業界において事業を展開している私たちの責務の一つである。」という認識を抱くにいたりました。将来、パチンコ業界に携わる人たちに今、私たちにできること・・・それは業界の歩みを正しく理解し、自分の働く産業に希望と誇りを持てる環境を整備し、未だ根強い、パチンコ業界のネガティブなイメージを払拭してゆくことではないでしょうか？移転、拡張リニューアルに際しましては、これを非常に意義深いものと捉え、㈱NPI総研と弊社の共同による運営を開始することを決意するに至った次第です。総合的遊技機博物館である当館は、業界内外、あるいは諸外国の方々にも広くご覧いただき、我が国固有の娯楽の王者パチンコに対する理解を深めていただくことに寄与することができますことを念願致しまして、当館の維持、発展にも心をくだいて参る所存です。



株式会社パラッツォ東京プラザ
代表取締役　徐東湖

創業以来40年、弊社は国民的娯楽として定着しておりますパチンコと共に歩んで参りました。現在、弊社は「遊びの文化を創造する」をテーマとして、新感覚の遊技場を関東地区に展開中ですが、思い起こせば創業当時私が手がけたのは東京・中野の雀球専門店でした。

今やパチンコ店では見ることのない雀球もそうですが、遊技産業には長い歴史があり、その歩みにおいては幾多の危機的状況もあったのですが、その都度それらの状況はメーカーの創意工夫による画期的な遊技機が登場したり、我々遊技場の営業に携わる者の努力によって克服し、現在に至っております。そのような遊技産業ですが、この度、ヤワタグループの八幡会長が中心となり、遊技産業の歩みを、「目で見て理解することができる」というコンセプトのもとに「パチンコ博物館」を整備されると伺い、その主旨に大いなる共感を覚えましたので、弊社もその運営に微力ではありますが、参加させて頂くことに致しました。業界の中でいまだ成長の過程にある弊社ではございますが、「温故知新」という観点も見失うことなく成長してまいりたいと思っております。その意味におきましても「パチンコ博物館」存在意義は極めて貴重なものであると思っております。

ご来館者各位におかれましては「遊びの文化の語り部」である各種の資料を存分にご覧下さり、遊技産業への正しい理解を深めて頂くことを念願する次第であります。



株式会社平成観光
代表取締役　東野　昌一

パチンコの歴史は100年になろうとしています。車産業やIT産業より、はるかに古くからありながら、いまだ社会から大きな産業として認知されているかといえば、そうとは言いきれないのが現状です。

この業界に携わっている以上、パチンコ業というものに誇りと自信を持ち、また関わる多くの人を幸せにしたいと考えてきました。幼少の頃からパチンコの音を聞きながら育った私にとって、この娯楽が1つの大きな産業として、また文化として認められるのが夢です。

現在まで、残念ながらいくら自らを律しコンプライアンスを遵守しても、社会的に高くは見てもらえない日々が続いてきました。しかし、ここにきて社会の流れが変わり、リーマンショック以降は金融機関からの評価も、また安定産業として雇用にも変化がでてきました。
社会の見る目が変わってきています。業界内でも自浄の動きがあり、大きな潮流変化の機会が訪れています。

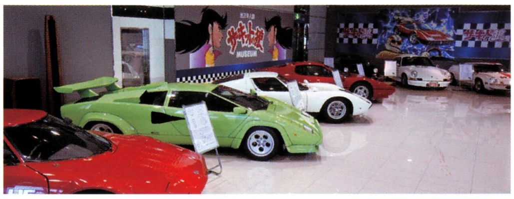
このたびヤワタグループの八幡会長が「パチンコ博物館」を整備されるとお聞きし、まさにチャンス到来という思いで賛同いたしました。「ルーツを学んで未来を掴む」というのが私の信条です。パチンコ博物館が、この産業の未来の繁栄につながると信じ、心から協力させていただく所存であります。

ヤワタグループ

サーキットの狼ミュージアム

所 在 地　茨城県神栖市息栖1127-26
TEL.0299-95-5550
HP　http://www.ookami-museum.com/



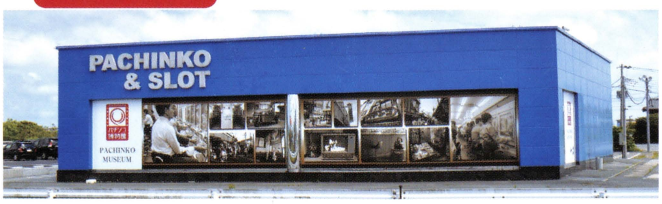




パチンコ博物館

所 在 地　〒289-2511 千葉県旭市イ4212-11
TEL 0479-75-4766　FAX 0479-75-4786
開館時間　午前11時から午後4時まで（入館は午後3時30分まで）
開 館 日　毎週日曜日
最寄り駅 / JR総武本線　旭駅下車　タクシー5分

HP　http://homepage2.nifty.com/ueno-p-museum/





株式会社 NPI総研　代表取締役 伊藤 和彦

〒110-0015 東京都台東区東上野4-1-9 ヤワタ上野ビル4階
TEL 03-5830-3987　FAX 03-5830-3968

2012年6月20日発行　